

氏名	
----	--

点数	点/100点
----	--------

各論演習 10-1

問1)

ユウビール(株)の金沢工場では、製品“ウルトラドライ(以下甲という)”と製品“エレガント生(以下乙という)”を量産し、累加法による工程別組別総合原価計算を採用している。両製品とも、第1工程と第2工程を経て完成する。第1工程では、工程の始点で原料Aを投入し加工する。第2工程では、工程の始点で第1工程の完成品と追加材料Bを投入し加工する。

下記の(資料)にもとづいて、次の設問に答えなさい。なお、各設問の最終計算結果に端数が生じる場合は、円未満を四捨五入すること。

(資料)

1. 製品甲と製品乙の生産実績データ

	第1工程			第2工程	
	製品甲	製品乙		製品甲	製品乙
月初仕掛品	6,000ℓ (50%)	6,000ℓ (50%)		0ℓ	0ℓ
当月投入	30,000ℓ	36,000ℓ	(前工程)	30,000ℓ	36,000ℓ
			(当工程)	6,000ℓ	4,000ℓ
計	36,000ℓ	42,000ℓ		36,000ℓ	40,000ℓ
月末仕掛品	5,000ℓ (50%)	4,000ℓ (60%)		1,500ℓ (60%)	2,000ℓ (30%)
正常仕損品	1,000ℓ (40%)	2,000ℓ (40%)		1,500ℓ (80%)	1,000ℓ (80%)
副産物	-	-		-	2,000ℓ
完成品	30,000ℓ	36,000ℓ		33,000ℓ	35,000ℓ

(注1) ()内の数値は、仕損品と正常仕損品の加工費進捗度を示している。正常仕損はそれぞれの加工費進捗度の時点で発生し、それ以後には発生しなかった。

(注2) 各工程の完成品と月末仕掛品への原価配分は平均法を用いている。

(注3) 正常仕損費の処理はいずれの工程も非度外視法によっている。なお、第1工程の仕損品は再処理後、翌月の原料として利用される。その評価額は1ℓあたり1,680円である。第2工程の仕損品の処分価値はない。

(注4) 副産物のビール酵母細胞壁は工程の終点で発生する。評価額は1ℓあたり186.0575円である。副産物の評価額は製品乙の完成品総合原価から控除する。

2. 月初仕掛品の原価データ

	第1工程	
	製品甲	製品乙
原料費	19,476,480円	18,360,000円
加工費	6,065,800円	5,912,000円

3. 原料の払出単価と消費量

	払出単価	消費量
原料A	3,200円/ℓ	66,000ℓ
原料B	4,000円/ℓ	10,000ℓ

4. 直接工平均賃率

第1工程	1,000円/時間
第2工程	1,200円/時間

5. 実際直接作業時間データ

	製品甲	製品乙
第1工程	16,000時間	14,000時間
第2工程	1,500時間	1,600時間

6. 実際機械稼働時間データ

	製品甲	製品乙
第1工程	9,900時間	16,000時間
第2工程	10,836時間	18,384時間

7. 製造間接費の配賦予算データ

製造間接費は2つのコストプールに分け、コストプールごとに工程別予定配賦率を用いて配賦している。各コストプールの当年度の予算、配賦基準と配賦基準総量は次のとおりである。

コストプール	配賦基準	工程	製造間接費予算（年額）	配賦基準総量（年）
段取支援部門	直接作業時間	第1工程	541,500,000円	361,000時間
		第2工程	72,000,000円	40,000時間
攪拌発酵部門	機械稼働時間	第1工程	624,000,000円	312,000時間
		第2工程	875,000,000円	350,000時間

【設問1】 解答用紙の仕掛品勘定を完成させなさい。

【設問2】 第2工程製品甲と製品乙の完成品総合原価及び月末仕掛品原価を答えなさい。

【設問3】 製品乙を充填し、顧客に販売する缶はレギュラー缶とマグナム缶の2種類がある。そこで、製品乙の各缶の完成品単位原価を答えなさい。ここで、レギュラー缶とマグナム缶はその容量等の物量的数値に基づき等価係数を決定している。当月の生産本数と等価係数は以下のとおりである。

	等価係数	当月の生産本数
レギュラー缶	1.0	1,686,000本
マグナム缶	2.2	110,000本

【設問4】 次の（語群）から下記の文章の空欄に入る適切な用語を選び、記入しなさい。ただし、⑤と⑥は複数の用語が入る可能性がある。

ユウヒビール(株)金沢工場ではウルトラドライ（製品甲）とエレガント生（製品乙）という複数種類の製品を大量生産している。この製品甲と製品乙は（ ① ）であり、原価計算の方法を組別総合原価計算としていた。また、製品乙のレギュラー缶とマグナム缶は、（ ② ）であるため、等価係数を利用し、組別総合原価計算より簡便な等級別総合原価計算を採用している。さらに製品乙を製造する過程で不可避免的にビール酵母細胞壁（副産物）が生産される。これは製品乙と（ ③ ）であるが組別総合原価計算を採用しない。なぜなら、（ ③ ）が少ないから、副産物を別途原価計算せずに主産物（本工場では製品乙）の総合原価から評価額を差し引く簡便な処理としている。一方で、（ ④ ）に生産される点で共通している連産品は別途原価計算する。これは、副産物と異なり、（ ③ ）が多いからである。

さて、組別総合原価計算は、1期間の製造費用を各製品ごとに直接集計することができる組直接費と、直接に集計することができない組間接費に分けるが、本工場における組直接費は（ ⑤ ）であり、組間接費は（ ⑥ ）である。

（語群）

- 生産量 ●経済的価値 ●同種製品 ●異種製品 ●必然的 ●偶然的 ●大量生産品
- 受注生産品 ●原料費 ●直接労務費 ●直接経費 ●製造間接費

解1)

(単位：円)
【設問1】

第1工程—製品甲

月初仕掛品原価		完成品総合原価	
原料費		原料費	
加工費		加工費	
当月製造費用		月末仕掛品原価	
原料費		原料費	
直接労務費		加工費	
製造間接費		仕損品 (原料)	1,680,000

【設問2】

	製品甲	製品乙
完成品総合原価		
月末仕掛品原価		

【設問3】

	製品乙	
	レギュラー缶	マグナム缶
完成品単位原価	@	@

【設問4】

①	
②	
③	
④	
⑤	
⑥	